荒尾市立府本小学校　校長便り　№２１

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和７年６月２３日(月)

話題提供　～「うちには関係ない」ではない現実～

数年前、気になる雑誌記事がありました。中味は、インターネットやゲームにのめり込み、あるべき姿を見失った少年たちの信じられない姿が書かれています。

寝食も忘れてネットのゲームにのめりこみ、学校や職場に行けなくなる人たちが現れ始めた。現実で生きることを放棄した彼らは、「ネトゲ廃人」と呼ばれる。その少年の手記だ。

「1カ月、風呂に入らなくても平気だった。大学には通わず、電話にも出ない。ガスも止められたが、不自由とは思わなかった。狭いアパートで、ベッドとパソコンの前を移動するだけ。血行が悪くなり、冬は足や手の指にしもやけができて痛かった。地方の大学に入学した18歳の夏休みから、ネットゲームに夢中になった。1人暮らしとなり、親の監視がなくなったのがきっかけだった。1日4時間が10時間、20時間と伸び、外の世界には関心がなくなった。食パンをかじり牛乳を飲む日々で、体重は6キロ落ちた。このゲームは、自ら主人公となって敵と戦うゲーム。ネット上で見知らぬ人とチームを組んで挑む。勝てば攻撃力や防御力が増してレベルが上がり、さらに強い相手と対戦できる。敵はいつ現れるのかわからない。仲間どうしで交代で眠って、戦った。勝てば達成感があった。何度打ち負かしても、また魔物が現れる。ネットゲームの世界に終わりはない。こんな生活を送るようになって3年たったある日、疲れ果て、宝探しと戦闘に明け暮れる日常が楽しく思えなくなり、ログインをやめた。以来画面を開いたことはない。ゲームにはまった本当の原因は自己嫌悪。第1志望の大学に挑戦しなかった自分が嫌だった。ゲームで現実から逃げた。そして膨大な時間を損した。」

この若者にまともな勧めはできるだろうか。これは社会の損失だ。

さて、どのように思われますか。異常な状況ですね。この文章で特に気になるのは、「ゲームにはまった本当の原因は自己嫌悪。第1志望の大学に挑戦しなかった自分が嫌だった。ゲームをしてれば何もかも忘れられた。」という部分です。結局、嫌なこと、苦手なことを避けて楽な方に流されてしまったことが原因なのです。私もそうでした。こうならないためには何が必要なのでしょう。先ずは勉強です。勉強しておけば自分の夢の幅を狭めずにすみます。次に、成功（達成）体験や挫折体験でしょう。挫折はしないに越したことはないのですが、私の場合は挫折とコンプレックスが次への活力になりました。最後に、親が子どもを突き放すということです。早い段階に「自分のことは自分で」という考え方を叩き込んでおいた方が、将来のためにもなります。いわゆる「親離れ子離れ」ということです。ある程度は甘えさせることも必要ですが、それが溺愛にならぬよう、また放任にならぬようバランスをとる必要があります。そこが子育ての難しいところです。子どもを育てるということは、私達の将来に直接関わる問題です。

偉そうにお話している私も、3人の子供の父親であり、現在、双子の就職が気になって仕方がありません。どのような場面においても、子育ては悩みます。

シリーズ「自分を語る」#21

中2から中3へ、クラス替えもなく、落ち着いた4月を過ごしましたが、さすがに中3ともなると、仲間の雰囲気が少し違っていました。いよいよ高校進学が見え隠れするようになったからです。それでも、仲の良かった仲間と一緒におバカなことばかりやっていました。2学期の文化祭での事、私達のクラスは「白雪姫」の劇をすることになり、私はなぜか「魔法使いのお婆さん」をやることになってしまいました。今でもこの写真が残っていて、我が子が見てゲラゲラ笑っています。丁度、この頃だったと思います。2学期のある日、仲間と一緒にのんびりと帰っている途中、私が自分の志望校について弱気な発言をしたところ、強い口調で「俺と一緒にあそこに行くんだろ？簡単に諦めるなよ！」その一言で、私も気合が入りました。この友だちは現在、名古屋大学でスポーツ心理学の教授をやっています。お互い「お前が教授か？　日本が危ういぞ。」「お前が校長？　俺の娘は通わせん。」なんて、言い合っています。こんな仲間がいたから、今の私があるように思います。こうして考えると、中学時代の後半は、永く付き合える仲間を探していた様な気がします。色々な事を冷静に、客観的に判断できるようになってきた時期だったのでしょう。当時の生活を振り返ると、楽しかったけど、大切なことは忘れなかったと言えるような気がします。私の両親はこう言います。「あの頃のおったちは、ちゃ～んと、友達は選べ”て言いよったけんなぁ。」中学時代、親が言うことはうるさかったけど、心のどこかで聞いていたのでしょう。親の影響力は凄いです。

高校受験の頃、私澤田は私立の受験が終わってすぐに風疹に罹ってしまいました。その後、公立高校受験まで殆ど勉強もできず（というよりせず？）、公立高校の試験当日を迎えました。案の定結果はさんさんなもので、発表の日は私立高校への校納金を持参して見に行きました。それでも何とか結果オーライで、その安心が元で高校時代はあまり勉強をしませんでした。それが影響し？第一志望大学への進学を諦めざるを得ませんでした。というより、その頃の私は楽をしようとしたのでしょう、難しいことから逃げたのです。困難を避けたのです。実は、それが私のコンプレックスとなって、ずっと、今でも「あの時こうしていれば…」と思い出すことがあります。怪我の功名といいますか、そのコンプレックスは、今の自分を支えているようです。「自分はあの時勉強しなかった。だから、人より多く勉強しなければならない。専門性をもった先生方より倍、いやそれ以上の努力をしないと、この世界ではやっていけない。」と思うようになりました。たまたま、研究指定を受けている学校でお世話になる時間が長く、その中で鍛えられました。今でも授業は下手ですが、子ども達や保護者の願いをスクリーニングして、どのような教育を提供していくのか、しっかり考えています。そして、教職が生業となっている今、貴重な税金から給料を頂くということはどういう意味があるのか、そして費用対効果はどうなのか、しっかり考えるようにしています。費用対効果はっきりとは見えませんが、子ども達の将来の姿や先生方の頑張りで判断できるでしょう。子どもとしっかり向き合う姿勢を忘れない様にしたいと思う澤田の独り言でした。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）